

# 青森県の地域医療について思うこと



自治体病院長代表小委員会

委員 照井 健

(国民健康保険板柳中央病院長)

かつて地域医療は大学医学部からの医師派遣によって担われてきた。初期臨床研修必修化後の大学自体の人員減少により、地域医療を支えることが難しくなり、さらに近年の「働き方改革」により、遠方の病院に臨時医師を派遣することも制限されると聞いている。そうなれば、大学に頼った地域医療は成り立たなくなるだろう。

それに対し、青森県では弘前大学の青森県内枠や青森県定着枠で入学した学生の「青森県地域医療支援センター」への登録を必須とし、卒業後は「キャリア形成プログラム」により地域医療へ派遣できる枠組みを開始した。これから数年後には、県から指示を受けた若いドクターが地域に派遣され、人員的な問題は解決できるだろう。しかし人員を割り当てるだけで良い訳ではない。私見だが、以下2つのことが重要と考える。

第一に、大病院で研修を受けたばかりの若いドクターが地域で働けるよ

うな環境を作る必要があると思う。例えば彼らは電子カルテしか知らない世代だが、当院も含め小規模病院や診療所では電子カルテは非常に高額で負担が重く、なかなか導入が難しい。県主導で、全県下の電子カルテ整備を進める必要があると思う。全県で同じ電子カルテを使用できればなお良いだろう。そうすれば、中央からへき地まで真の診療ネットワークが形成でき、地域医療を担う若い力にも有益となり、へき地の病院で診療した重症患者の相談、紹介がスムーズにできるようになるはずだ。厚生労働省が進める「地域医療連携推進法人」などを利用することで、電子カルテの導入、環境整備を最小限の資金でできるようになると思う。

第二に、若いドクターの勉強の熱意に応える環境作りも必要だろう。へき地では最新医療から取り残される不安が出てしまう。県と大学が連携して最新の医学に触れやすい環境整備が必要だと思う。

これら2つの環境を作ることができれば、地域医療を担う若い力にとって有益で、継続的に医師を確保することができると思う。

—青森県自治体「病院」勤務医等確保対策資料から転載—